発掘ニュース

第 41 号
平成 5 年 11 月 21 日
発行 財団法人いわき市教育文化事業団
TEL 0246 (29) 0391

菅俣B遺跡

― 泉第３土地区画整理事業関連発掘調査 ―

菅俣Ｂ遺跡は泉町滝尻字菅俣地内にあり、９月から泉第３土地区画整理事業による発掘調査を行い、多くの成果をあげ終了いたしました。

遺跡は昨年度発掘調査した古墳時代の竪穴住居跡（４４棟）が多数見つかった折返Ａ遺跡の西側に隣接しています。

調査結果は古墳時代前期～中期の竪穴住居跡や掘立柱建物跡、近世の堀江などが確認されました。

なかでも、古墳時代前期（今から約１，７００年前）の竪穴住居跡の一つに東日本でも最大級の竪穴住居跡が見つかり注目されています。

一辺の長さが約１０．５メートルの約３３坪の大きな床面の中央には炉をもち、壁際にはほぼ等間隔に細い柱を立てていたこともわかりました。当時どのような人達が使っていたのでしょうか？

立っている人が小さく見える巨大住居跡（第３号住居跡）

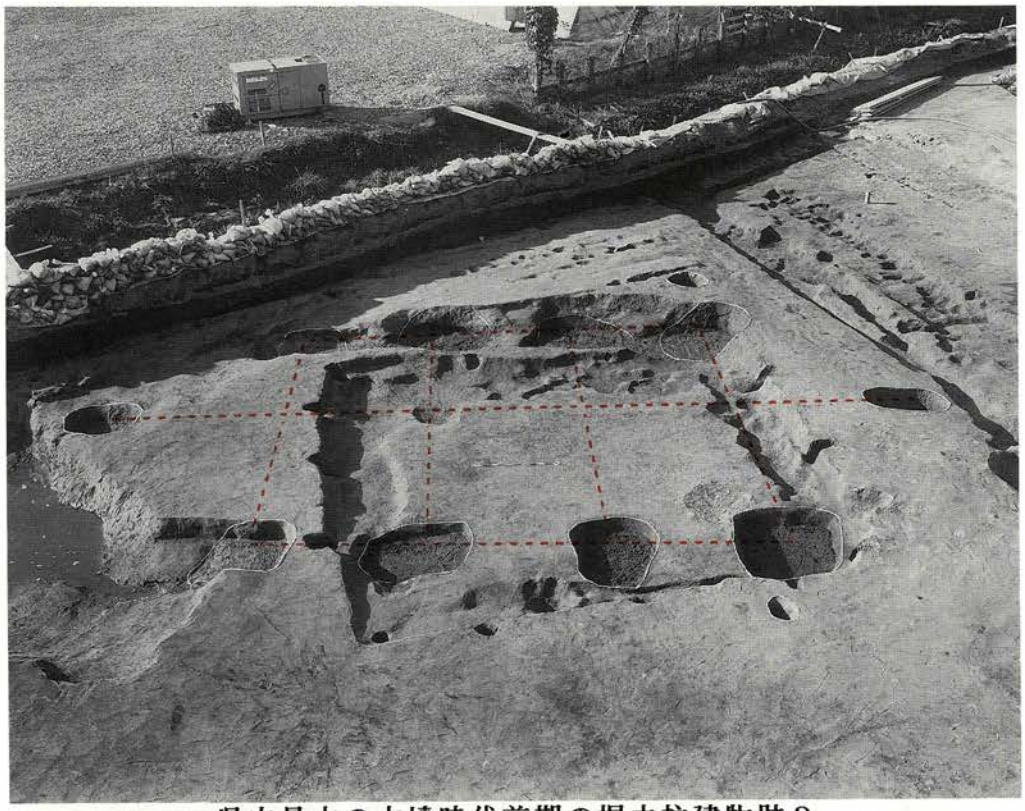
とじておきましょう

古墳時代と掘立柱　建物跡

古墳時代とは、４世紀から７世紀の今から約１３００年から１７００年前の時期で、前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）に代表されるような豪族のお墓が全国各地で造られた時代です。いわきでも全長１１８メートルの四倉の玉山一号墳や平夏井の甲塚（かぶとつか）古墳が知られています。

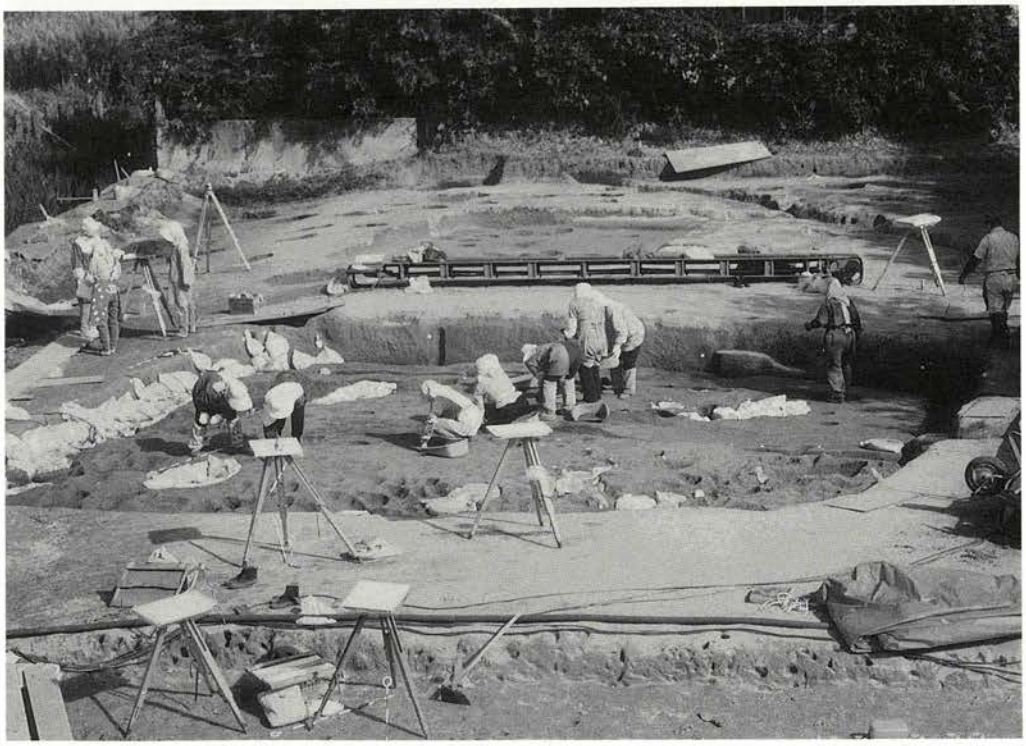
これまで、この時代のいわき地方の人達の住んでいた住居は、平地式・高床式の住居もあったと予想されているのですが発掘調査による発見例がなく、地表面から数十センチメートルを掘りくぼめて床面とした竪穴（たてあな）住居が一般的とされてきました。つまり、県内では土中に穴を掘り、そこに柱を埋め立てて板張りの高床を持つような掘立柱建物跡が検出されるのは古墳時代以降の８世紀後半からとされていました。

ところが、今回の菅俣Ｂ遺跡の調査では、古墳時代前期の住居跡とともに掘立柱建物跡が伴うことが明らかになり、いわき地方において関東以西の影響が予想以上に早かったことを知ることができました。こうした集落構成は関東や東海地方では一般的な在り方とされています。



県内最古の古墳時代前期の掘立柱建物跡？

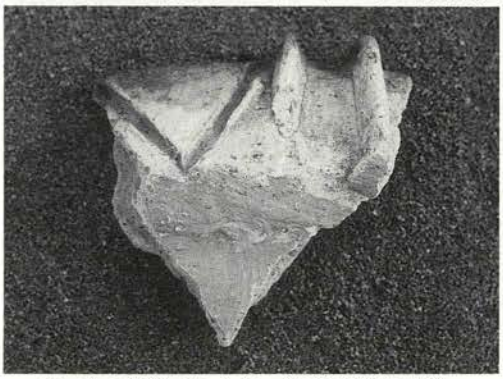
古代の人たちの生活の跡が見えてきました



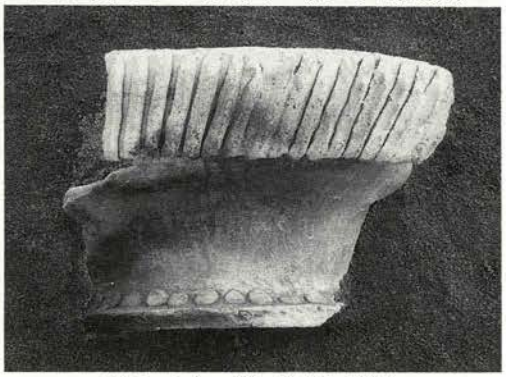
古代の住居の中を掘っています

ふせられた甕（かめ）（３号住居跡）

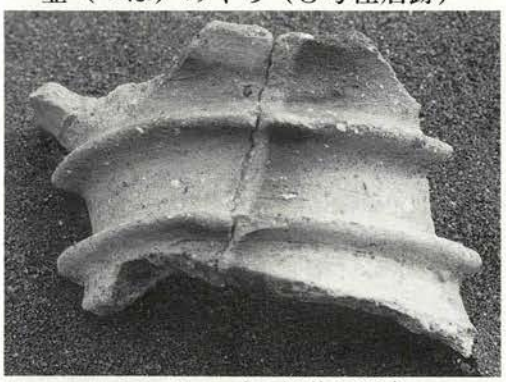
左の甕の中のようす（３号住居跡）



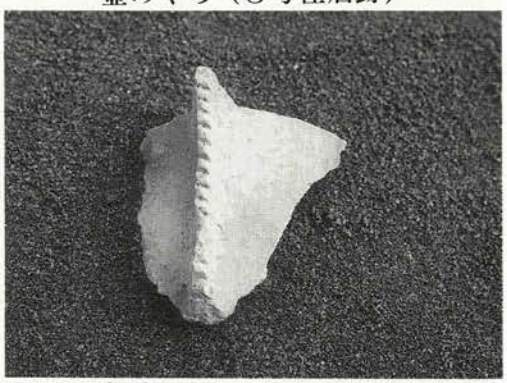
壺（つぼ）のくち（３号住居跡）



壺のくち（３号住居跡）



壺のくび（２号住居跡）



壺のくち（６号住居跡）

石製模造品（おの）

石製模造品（？）

石製模造品（かたな）

とじておきましょう